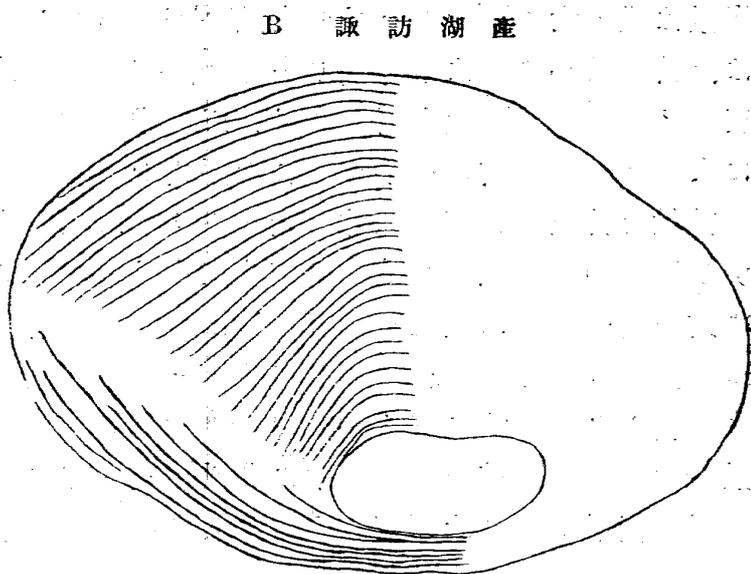


核は鱗の下方に存在し又狭小である。尙ほ此上下兩輪層は、鱗の側方で接觸してゐないから、其の中間に稍や透明な無輪區域を備へてゐる。又下輪層は殊に太く鮮明な場合も少くない。然るに諏訪湖産では鱗上の輪層は、核の上下を通じて數に甚しい懸隔や細太の區別も少い。即ち上方には17乃至20輪層、又上方には11



乃至12輪層があつて、核も鱗の下に偏することもなく、其の形も大である。且つ上下の兩輪層は互に接觸して、其の間に空隙を存することがない。

斯る鱗の差異は、體長8.5糎の前から已に多少は判然してゐるが、9糎以上となると愈顯著となる次第である。鱗は體の保護機關であつて、直接外界の刺戟即ち環境の變化に照應し、魚の生命をして安康ならしむる使命を有するものであるから、其の變異は、乃ち環境の影響と陶冶とに據つて享けたものと、考定するを妥當としなければならない。然し何故に鱗上の輪層が、斯く新に布置せらるゝ様になつたか、又果してそれが魚の生存に如何なる福利を齎す様になるかは、頗る困難な問題で容易に釋明は出來ない。

兎に角諏訪湖ワカサギを原產地産と較査して知つた、體格の變異少くとも頭部の特殊の形狀と鱗の性質とは、諏訪湖と云ふ新境遇に順化することから得たものであつて、即ち其の原始性質から偏倚した特徴と云ふべきものでかる。若し此性質が固定し遺傳する様なことがあれば、諏訪湖ワカサギは純然たる一種族となる譯である。

筆る擱くに臨み、本研究に資料を供給せられて、多大の同情を辱ふした、河合巖君及び太田知度君に感謝の意を表す。

(大正十五年三月二十日稿)

臺灣産淡水魚の一新種「トゲウナギ」

(大正十五年五月二日受領)

理學博士 大島正滿

大正11年8月臺灣總督府淡水養殖試驗場長小林彦四郎氏より同試驗場所在

地所新竹州霄裡附近の細流に於て捕獲せる鰻に類似せる珍魚2尾を惠與せられたるが、頃者閑を得て之を検査せる結果、右は印度及び馬來地方の淡水に發見せらるゝ *Mastacembelidae* に屬する魚族にして、我が領域並びに支那朝鮮等には未だ嘗つて發見せられたる事なきものなる事を知るを得たり。且つ又其形態特徴既に記載せられた同屬のものと甚しく異なり其新種たる事疑ふの余地なきを以て、茲に本魚に附するにトゲウナギの名稱を以てし左に其特徴を記載する事となさんとす。

Mastacembelidae に包容せらるゝ魚族は其外見鰻に酷似せるのみならず、口部並びに鰓の構造を初めとし腹鰭を缺如せる點及び内部諸器官の構造等之を鰻と呼ぶも敢て不當に非ざる事を明示す。只普通の鰻と著しく異なるは、背鰭の前半部一列の棘條に變化せる事と、尾鰭の前方に鋭き3個の棘條を備ふ事之なり。

前記小林氏は本魚の採卵孵化に成功せるやに記憶せるが果して然りとせば海中に移行せずして産卵する點に於て本魚は又普通の鰻と其撰を異にするものと云ふを得べし。

Family *Mastacembelidae*.

Genus *Mastacembelus* CUV. & VAL.

1763. *Mastacembelus* GRONOW, Zoophyl., P. 133.

1829. *Mastacembelus* CUV. & VAL., Hist. Nat. Poiss., VIII, P. 452 (revived; onepast).

トゲウナギが屬する *Mastacembelus* なる屬名は最初 GRONAW によりて附せられたるものなれども、後 CUVIER & VALENCIENNES は其際記載せられたる二種の内 *Ophidium aculeatum* BLOCH をタイプとするものに *Rhynchobdella* なる屬名を與へ *Ophidium simack* WALBAUM をタイプとするものに *Mastacembelus* なる屬名を與ふる事に其意義を限定せり。

GRONOW に先だち KLEIN は之と全く異なる魚族に對して *Mastacembelus* なる名稱を與へたるが、1758 年以前即ちリンネの分類綱目以前の名稱を是認する BLEEKER は KLEIN の意義を繼承し *Mastacembelus* なる屬名を *Tylosurus* 屬の魚類に與へたるが故に其間多少の混亂を惹起せり。BLEEKER の文獻を手にする場合は此點に注意するを要す。

Mastacembelus Kobayashii sp. nov. トゲウナギ (新稱)

尾鰭を除ける體長は頭長(吻部突起を除く)の 6.19 倍、體高の 10.04 倍。背鰭 34 棘條、54(?) 軟條、臀鰭 3 棘條、50(?) 軟條、胸鰭 20 軟條。頭長は頭幅の 3.55 倍、頭高の 2.45 倍、吻長の 3.65 倍、眼徑の 11 倍、眼間距離の 14.60 倍、胸鰭の 4 倍、尾鰭の 3.65 倍を算す。

體細長にして稍高く其狀鰻に似たり。尾部に近づくに從ひて著しく側扁せる

が體の前半部は後半部に比して細く尖れり。肛門部に於ける體高最も大なり。頭部比較的細長にして吻部長く尖れり其先端柔軟にして下垂し下顎の先端を覆へり尖出部の末端は鋭く尖り其兩側に圓柱狀をなせる肉質の突起物を備ふ。吻端下面平滑なり。下顎は上顎に比して僅に短かし。口は廣く斜に開き口角眼窩の前縁を通過する垂直線に達す。唇は薄し。上下兩顎共に微細にして鋭く尖れる齒群を備ふ各齒の先端孰れも後屈せるが其大きさは前方に近づくに從つて大なり。眼は小なり前方頭頂に近く位す。眼前下方に鋭く尖れる1個の棘あり尖端後方に向ひて眼下に達す。前鰓蓋の後縁は平滑にして齒狀をなさず。鰓孔稍下方に位し其前端前鰓蓋の後角下部に達す。

體鱗極めて小さくして體を密着す。吻部並びに下面を除き頭部は細鱗を以て覆はる。側線は初め體の上部を走りて漸次下降し尾部に於ては其中央部を走る。

背鰭尾鰭及び臀鰭は相連続して其境界を定め難し。背鰭の棘條部は軟條部に比して遙に長し第一棘條は胸鰭の三分の二に位する點の上位に着生す棘條の長さは後方に近づくに從ひて増大す。臀鰭棘條は背鰭棘條に比して強大なり第二棘最大なり軟條部は背鰭軟條部と其長さを等ふす。胸鰭は圓く廣くして短かし腹面に近く着生す。腹鰭無し。

酒精漬標本に就て之を見るに、體の側面褐色を帯びたる灰色を呈し處々に微細なる黄斑を交ゆ尾部に於ては其黄斑相連なりて稍明なる縦條となる。眼の直上に起り背鰭の兩側に沿ひて尾部に達する淡黄色の横條あり背部中央線に沿ひ雲狀をなせる小黑點の散在するを見る。頭部下面及び腹面は白色に近し。背鰭尾鰭並びに臀鰭は灰色なり多數の小黄斑を有す兩者の外縁共に帶黄白色を呈す。胸鰭は白色なり。

頭部に於ては吻端より眼窩を越へて前鰓蓋の後角に達する黒條あり。

體の全長 142 cm に達す。

右は大正 11 年 8 月 7 日新竹州霧裡に於て採集せられたる 2 尾の内其小なるものに就ての記載なるが全長 195 cm に達せる大なるものは體の全面帶褐灰色にして黄斑黄條明ならず背鰭は 35 棘條 54(?) 軟條臀鰭は三棘條 45(?) 軟條を算せり。

Mastacembelus に屬する種類の中には尾鰭と背鰭並びに臀鰭との分界明なるものあり。又三者連続して其分界明ならざるものあり。後者に屬するもの即ち本種と同一部類に屬する既知種には左の 6 種あり。

M. armatus LACÉPÈDE. 産地 印度、錫蘭、緬甸

M. guentheri DAY. 産地 印度マラバール海岸

M. simack (WALBAUM). 産地 アフガニスタン

M. erythrotaenia BLEEKER. 産地 ボルネオ

M. argus GÜNTHER. 産地 暹羅

M. vaillanti FOWLER. 産地 ボルネオ

本種と之等と著しく相違せる重なる點は背鰭及び臀鰭の條數なる事左に示すが如し。

	<i>M. armatus</i>	<i>M. guentheri</i>	<i>M. simack</i>	<i>M. erythrotaenia</i>	<i>M. argus</i>	<i>M. vaellanti</i>
D.	32-39/74-94	27-30/60-74	32-34/80	34-37/70-75	32/60	28/58(?)
A.	3/75-88	3/62-75	3/80	3/71	3/56	3/65(?)

即ち本種は D. 34-35/54. A. 3/45-50 なるを以て其條數既知種に比して著しく尠なし。DAY は此種の魚類は食用に供して其價值大なる旨を記述せるが果して然るや否や本種は只僅に數尾を得たるに止まるを以て茲に食用魚としての價值を判斷するは難し。

終に臨み貴重なる標本を惠與せられたる小林彦四郎氏に對して感謝の意を表す。

講 話

馬來小區の有蹄類(其の四)

理學博士 飯 塚 啓

第三亞目 偶蹄類の續き

鹿科 (Fam. Cervidae).

此の科に屬するものを眞の鹿類と云ふ、其の角は骨質にして一定の時期に至れば交脱す。鹿類は地球上大概の地方には棲息するものなるが、亞弗利加には之を産せず、又濠太良利亞の如きは鹿類のみならず有蹄類に屬する動物は全く産せざるの地方なり。而して馬來小區に於ては *Rusa* (or *Sambur*) と *Muntjacs* とを産するなり。今便宜上此等兩者の區別の要點を摘記すれば次の如し。

第一 肩の高さ2尺以上に於て、角は長く通常三枝を有し短き基部を備ふ、懸蹄は大なり、雄の上顎の犬齒は小形にして牙狀を呈することなし。……………鹿屬 (*Cervus*).

第二 肩の長さ2尺以下にして、角は通常二枝を有し、頗る長き基部を備ふ、懸蹄は小形なり、雄の上顎の犬齒は大にして牙狀を呈す。……………ムンチャク屬 (*Muntiacus*).

鹿角を記載するに當り、其第一枝即ち最下位にある枝を *Brow-tine* と云ふ、第二枝を *Bez-tine* と云ふ、次に主軸即ち *Beam* 頂端を *Suroyal* 又は *Crown* と呼ぶ、而して *Sambur* 鹿にありては此の内第二枝 (*Bez-tine*) を缺くものなり、通常 *Sambur* 鹿に於て第三枝 (*Trez-tine*) と稱するは主軸の頂端の更に分岐したるものと見做す可きなり、故を以て此の場合に於ては *Sambur* 鹿の角は一